

「日本事情」におけるアクティブ・ラーニング

—『越前若狭いろはかるた』を使用した授業の紹介—

留学生センター 膳 吹 覚

1. 担当科目

私が担当する「日本事情A」は、前期開講(火曜日1時限目)で2単位。共通教育科目第3分野「文化」(日本語・日本文化系)に属する。受講生はすべて留学生である。このレポートでは、某年に開講した「日本事情A」を例に挙げて述べてみる。この授業は共通教育科目であるが、例年、短期留学プログラム「日本語・日本事情系科目」の「日本事情2」との抱き合わせとなっている。教室はK330。受講生は合計30名。その内訳は共通教育科目「日本事情A」には27名、短期留学プログラム「日本事情2」は3名(ドイツ2名、中国1名)である。「日本事情A」の受講生を所属別に見ると、学部生は1年生が5名、2年生が4名、3年生が6名、4年生が1名の計16名。科目等履修生が10名(協定大学からの交換留学生)、日本語日本文化研修生が1名である。また、「日本事情A」の受講生を国籍別にみると、中国が過半数の20名を占め、以下、マレーシア・ベトナム・インドネシアが各2名、ドイツ1名であった。

2. 「福井事情」の構築と『越前若狭いろはかるた』

一般論として、「日本事情」は日本の大学で学ぶ留学生が日本に関する知識教養を学習し、その結果として受講生の日本への理解がより深化し、留学生活がより円滑に進展することを目的とする。そのためであろうか、今、私の手許にある「日本事情」と名の付く教科書を見ると、日本を1つの対象として一般化し、ステレオタイプ的に記述したものが多くある。また、そこで扱われている日本とは、東京を中心とする首都圏のことである場合が少なくない。そのために本学で学ぶ留学生にとっては、時にリアリティーが乏しいトピックに出会うと、どこか遠くの国の出来事のように感じてしまうことがある。そこで、私は本学で学ぶ留学生が今よりもアクティブに授業に参加できるように、2009年度から福井県を教材とした「日本事情」、すなわち「福井事情」の導入に舵を切った。

「福井事情」にアクティブ・ラーニングを導入するためには、まずそれに適した教材が必要である。そこで、私は自らがその制作に携わった『越前若狭いろはかるた』(ふくい文化研究会、2008年12月出版)を、この授業の教材に選定した。

『越前若狭いろはかるた』は福井県全域を対象とした郷土カルタで、いろは47文字(「あ」「ゑ」を含む)に「京」を加

えた48枚を1組とする。このカルタは福井県の素晴らしい自然、歴史、文化を多くの人に知ってもらい、後世に伝えることを目的として制作されたもので、札には①「石橋木橋 つくも橋」、②「栄華をしのぶ 朝倉遺跡」、③「気比の松原 大鳥居」などの名所旧跡をはじめ、④「日本一の メガネ産地」、⑤「貝殻ちりばめ 塗りの箸」、⑥「黄色いタグの 越前ガニ」などの名産品、⑦「白山開いた 泰澄大師」、⑧「楽しみ吟ずる 橋曙覧」、⑨「維新で活躍 由利公正」などの歴史(偉人)、⑩「蝶よ花よの 左義長まつり」、⑪「お水送りは 鵜の瀬から」、⑫「町中を練る 武者人形」といった祭礼、⑬「梅の香かおる 三方五湖」、⑭「水仙凜と 春を待つ」といった自然など、福井県が持つさまざまな魅力が凝縮されている。また、このカルタは子どもから大人まで、幅広い世代に普及させたいとの方針のもとで制作されたもので、読み札にはすべて振り仮名を付け、解説は読み札の裏には一般向きのものを、絵札の裏には児童向きのもの(振り仮名付き)を配した。また、絵札(版画)と読み札の文字(書)のバランスを考慮し、美術品としても十分に鑑賞できる仕上がりになっている。



このように『越前若狭いろはかるた』は日本人が使うことを前提にして制作されたカルタであり、留学生(外国人)が使用することを前提にして、そのための特別な配慮工夫を施したものではない。「あ」「ゑ」の文字を除外しなかったことや、解説に英語や中国語の訳文を併載しなかったことから、それは明らかである。しかし、本学で学ぶ留学生の日本語能力(入学時で日本語能力試験 N2 合格レベル)であれば、十分にこのカルタの読み句を理解することは可能である。また、このカルタの読み句や解説

文にはすべて振り仮名が付されており、非漢字圏からの留学生が予習する際の一助ともなる。ただし、授業で使用する際には「ぬ」「糸」の2枚の札は除外した。

3. 授業の概要

授業では第1回目の講義で、福井県全域を記した地図を配布し、その概要を説明する。その後、『越前若狭いろはかるた』を取り出し、4月なので㊦「桜のトンネル 足羽川」と留学生によく知られている㊧「天下の奇勝 東尋坊」の2枚を例に挙げて、カルタについて概説した。ここではカルタの歴史はできるだけ簡略に済ませ、ゲームとしての遊び方に重点を置いた。そして、6人1組とし、『越前若狭いろはかるた』の散らし取りを体験させた。この時、事前に「ぬ」「糸」の2枚は除外しておき、計46枚でゲームを行った。また、句の読み上げは教員が担当した。ゲームはゆっくりとしたペースで2回行い、「お手つき」などのルールを教えながら、第1回目の授業は終了した。この日は受講生がその「目」と「耳」と「手」を使って、カルタを通して、福井県について興味を持つように留意した。



第2回目の授業では、まずグループ別にカルタを使って散らし取りを1回行った。そして、各グループの上位者から順に、46枚の絵札の中からプレゼンテーションで使いたい札を1枚ずつ選ばせる。この時の受講生は30名であったから、16枚が選ばれずに残った。各自が札を決めた後、準備しておいた用紙にその札にある、

- 1) 読み札の句
- 2) 絵札の裏の解説(児童向き)
- 3) 読み札の裏の解説(一般向き)

の3点を転記させる。このことによって、受講生は自らを選んだ札のおおよその意味を改めて確認できる。プレゼンテーションに際しては、

- 1) 毎時2名乃至3名ずつが、パワーポイントを使用して、日本語で行うこと
- 2) 福井県に関することは、本学図書館郷土資料室と市立中央図書館で調べられること

- 3) できるかぎりカルタに詠まれた現地を訪れて調査すること

- 4) ウェブサイトからの転載はできるだけ避けることなどを事前に指導した。

第3回目から第14回目までの授業は、留学生によるプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションは1人約15分で、プレゼンテーションの前に教員が当該のカルタを学生に示し、その後、担当者がプレゼンテーションを行った。終了後には教員が補足説明を加えたり、必要に応じて訂正したりした。プレゼンテーションは残念ながらウェブサイトから転載した写真や情報を使用したものが6割を超えた。受講生自らが図書館で調べたり、現地を訪れて調査したり、彼らが撮影した写真を使用したりした学生は4割弱に過ぎなかった。つまり、過半数の受講生はウェブサイトを見るだけで、プレゼンテーションを済ませたのである。最終の第15回目は学生に選ばれなかったカルタ16枚について、教員が1枚ずつ提示しながら講義を行い、最後に1回、散らし取りを行って、授業を終了した。なお、評価は学期末に各自のプレゼンテーションを整理したものをレポートとして提出させ、その成績によって判定した。

4. 課題と展望

受講生にはできるだけカルタの札に詠まれた場所に行くように指導したが、なかなか実行されなかったことが課題として残った。自転車と公共交通機関以外に交通手段を持たない留学生にとって、足羽川や丸岡城はともかく、夜叉池や水晶浜に足を運ぶことは確かに難しかったかもしれない。この問題を解決するためには学生がプレゼンテーションする札を福井市近郊のものに限定するか、あるいは年ごとに札の地域を限定し、大学の公用車を利用して教員が引率してその地域の現地調査を実施するか、のいずれかが考えられるであろう。しかし、前者にしたところで、必ずしも全員が現地調査をする保証はない。後者は学生の能動的な活動と言う色彩が薄められてしまい、また、受講生数によっては公用車では無理なケースも考えられる。そこで、現在検討しているのは、学生がプレゼンテーションする札を福井市近郊のものに限定したうえで、本学からほど近いところにある福井県立歴史博物館との連携を図るというものである。同館には福井の歴史や文化を展示した常設展があり、それを見学することでカルタに詠まれた福井の文化を間接的にではあるが理解できるのではないかと、という目論見である。この目論見が功を成すかどうかは今後の課題である。